

[研究論文]

# アイヌの散文説話(ウウエペケレ)における異類婚姻譚の再考証

## Reconsideration of Hierogamy in Aynu Prose Narrative (Uwepeker)

本田 義矢

株式会社セガゲームスエンタテインメントコンテンツ事業本部第4開発1部\*

Yoshiya Honda

Game Designer

Game Design Section #1 / 4th Development Division Department #1

4th Development Divisional HQ / Entertainment Content HQ

Sega Games Co., Ltd.

**Abstract:** 道南地方のアイヌの散文説話におけるカムイと人の婚姻譚、いわゆる異類婚姻譚においてどのような法則が働いているのかを、近年のアーカイブ公開の進展により利用可能となったものも含めた異類婚姻譚 55 編を用いて分析し、従来の先行研究に対して新しい異類婚姻譚の視点、要素の指摘を試みる。従来の先行研究を検討し、その共通の見解に対する疑問と限界点について指摘し、異類婚姻譚に多様な要素が存在していることを検証する。さらに異類婚の考察から、神々と人間の関係がどのように築かれているかを分析する。

This paper describes the rules applied in the marriage between the gods and the people in the Aynu's prose narrative found in the southern region, also known as hierogamy. We analyze 55 Aynu folklore stories, provide a critique of previous research, and find new structural elements and perspective of hierogamy. We also explore prior research and provide criticisms made in such study. We then verify importance of the various elements in hierogamy. Finally, we analyze the development of the relationships between the gods and the human beings.

**Keywords:** アイヌ、異類婚姻譚、散文説話、カムイ、神話  
Aynu, hierogamy, narrative literature, kamuy, mythology

\* 投稿時の所属は、慶應義塾大学総合政策学部 4 年

## はじめに

本論は道南地方のアイヌの散文説話において人間(アイヌ)と神(カムイ)との婚姻譚、すなわち異類婚姻譚を分析し、その性質や構成要素について先行研究をもとに再考証するものである。

北海道のアイヌには、数多くの物語が口伝で現在まで語り継がれてきた。現在では多くの語り手が亡くなっており、実際に物語を口伝で聞くことができる機会は少なくなっているが、萱野茂(1926-2006)をはじめとして多くの研究者の手によって物語は録音、記録され、現在に残っている。

アイヌの神話において神々の存在は「カムイ」と呼ばれ、自然の中に生きる動物、植物、自然そのものに祈りを捧げる。しかし、神(カムイ)と人間(アイヌ)の存在は単なる支配-被支配、創造-被造等の関係に収まらない。カムイは人間の国を素晴らしく豊かな世界だと思っており、動物の衣を来て人間の世界(アイヌモシリ)に遊びに行く。獲物として肉体を手土産に渡し、人間の国でご馳走や踊り、ユカラ(語り)を満喫し、人間からのお土産を持って神の国(カムイモシリ)に送り返される。人間がもたせた酒や木幣などのお土産はカムイには作れないものとして、カムイモシリで自らの神格を高める要因となる。

カムイが神として、絶対の権能を人間の上に提示して、従うものに恩恵を与えるのではなく、お互いに持ち物を渡し合い、まるで交換しているかのような、一見対等にも見える関係を築き上げている。

人間がカムイによって不利益を被った場合、それはカムイの側での重大な過失となる。そのような場合にはアイヌはカムイに対して抗議を行う。カムイはそれを受けて、人間からも非難され、他のカムイからも非難される。場合によってカムイは、地獄である湿地の国に落とされることすらある。

このような関係性の中から行われる異類婚とはどのようなものであるか、本論では考証する。なお、本論で扱う物語はアイヌの口承文学の中で、主に人間の話として語られてきた「散文説話(ウウェペケレ)」に焦点を絞る。また、本論は口承文学に基づいた考察のみを行い、民俗的・民族誌的データは、参考にはしつつも直接の考察の対象外とする。また、本論文は原語に即した分析を取り扱いつつも、コンテンツを中心とした分析を行う。これは、奥田(2017)

が論じた、新しい口承文芸研究の展望に則した分析を行うためである。詳しくは2章冒頭で論じる。

まずは散文説話における異類婚姻譚についての先行研究を検討し、その論点と課題を整理し、このテーマに関する問題点と批判の提示を試みる。次に筆者が新たに公開されたアーカイブから収集した散文説話の異類婚姻譚55編を、筆者が設定した要素・観点ごとに体系的に分類し、それを集計したものを参考に議論する。そして、その分類・集計から推測できる異類婚の要素やテーマについて、個別の散文説話の物語展開を紐解いていくことで分析し、変数の設定を通じた分析をすることでは掴めなかった文脈や物語の細部を検討することによって、異類婚について従来の視点からは得られなかった新たな要素や性質について論じる。最後に、今までで判明した要素や結論を出発点として、アイヌの世界観における人間と神々の関係性について言及していく。

## 1 散文説話における異類婚姻譚に対する先行研究

アイヌの散文説話における異類婚姻譚については幾つかの先行研究が存在する。

荻原(2016)は神々の物語として語られる神謡<sup>1)</sup>から見えてくる異類婚姻譚を紹介する中で散文説話についても触れている。人間の女性を、鯨や狐などのカムイが誘惑するような話を引き合いに出しつつ、散文説話におけるテーマや理念、世界観は、神謡とは相容れないものとしながらも、北方に広く分類される人と動物の婚姻譚の系譜に属し、その特徴のひとつとして婚姻を退けようとする傾向があることを述べている。

高島(2006a, 2006b)は他の民族に伝わる異類婚姻譚と比較し、アイヌの異類婚を位置付けようとした。高島(2006a)はケルトに伝わる妖精伝説とアイヌの民話を比較し、異類との婚姻には常に限界が存在していると主張した。また、高島(2006b)では、北方の遊牧民と本州の和人、そしてアイヌのそれぞれの民話を比較し、異類婚が禁忌とされる日本と、異類婚に対して寛容なユーラシアの中間形態としてアイヌの民話を考察しようと試みている。アイヌの異類婚を忌避され、禁じられているものとした上で、その抜け道として

存在しているのが、人間の国でかりそめの結婚生活を送ったのちに、早逝し神の国で再び結ばれる「二重婚」であると主張した。

丹菊(2010)はニヴフ民族との比較によってアイヌの異類婚を分析し、そこからアイヌの異類婚姻譚に登場する「守護神」<sup>2)</sup>に関して考察を行っている。丹菊(2010)はアイヌとニヴフの異類婚の成否については傾向があるとし、蛙、狐、雷などは失敗し、クマや狼などは成功する場合があるとした。ニヴフもこれと共通の傾向を持つと言い、また、ニヴフの口承文学の異類婚は、異類の種類が「神」か「動物」かで合否が分かるとし、神であれば成功し、動物であればそれは失敗するという。またクマは人間よりも強力であり、クマが強引に人間と結婚しようとするればそれは阻止できないのだという。しかしアイヌの口承文学、特に散文説話では「クマやオオカミが相手でも異類婚は基本的に拒否すべきであり、少なくとも「一時的な別離」が不可避である。つまり、異類婚禁止のルールが前提となり、守護神がそれを守ろうとする」法則が働くという<sup>3)</sup>。

北原(2018)はアイヌの動物変身譚における変身の法則について論じる過程において、異類婚姻譚について触れている。北原(2018)は、アイヌの民話において、動物がヒトの姿や、自分とは別の動物の姿に「変身」する話に注目し、アイヌの民話・神話において変身が、語られる物語の中でどのように機能しているのかを検討している。

北原(2018)の主な趣旨は、動物変身譚の描かれ方と、「霊送りなどの民俗霊の背景となる動物婚と矛盾する事例を」(p. 42) 見出すことであり、異類婚姻譚はそこで使われる手法に過ぎないわけであるが、その中で北原(2018)はアイヌの異類婚姻譚について「共生する条件として「同じ姿になる」ことが重要であり、それが満たされない場合には婚姻関係が成立しない傾向が指摘できるだろう。」(p. 42)と指摘している。また、異類婚が失敗し、人間が動物を退治する話については「動物との婚姻に対する拒否感情」(p. 43)があると結語内でも述べている。

いずれの先行研究においても、アイヌの異類婚姻譚についてのテーマ、特徴として触れられているのは「異類婚の忌避」である。それぞれにおいて、述べ方や多少の例外を認めるか認めないか等の差異はあるが、「異類婚は忌避

され、人間は人間、動物は動物の婚姻が原則とされる」という見解は大方のところで一致している。

しかしこれらの研究は同時に問題点を抱えている。一つは収集している散文説話の絶対数が少ないことである。各先行研究が資料として紹介している散文説話は5～10話にとどまっており、現在公開されている散文説話を幅広く取り扱っているとは言い難い。荻原(2016)は神話については多くの説話を取り扱っているが、散文説話の異類婚姻譚については1編しか取り扱っておらず、裏付けが取れているとは言えない。また、多くの散文説話を例外として排除している点も問題である。高島(2006b)については、中村とも子、弓良久美子、間宮史子(1987)が500話以上の日本の昔話を収集し統計を取った結果、少数ながら和人の民話にも幸福な婚姻を継続する話型があることを紹介している。丹菊(2010)はアイヌの異類婚姻譚において、主人公について「憑神」<sup>4)</sup>が異類婚禁止のルールに則ってアイヌを異類婚から守ろうとすると主張しており、一部の異類婚姻譚には阻止のモチーフが実際に働いていることも確認できるが、中にはその憑神と結婚を果たす異類婚姻譚も存在している<sup>5)</sup>。以上から先行研究が一部の説話にしか焦点を当てていないことが分かる。

アイヌの散文説話では異類婚の忌避だけでは説明できないような説話が多く存在する。ワシの神に見初められて求婚され、共に人間の村で添い遂げる話や(52.「ワシ神の化身と人間の娘」)、熊の神に惚れられて殺されかけるが、熊の神の従兄弟に助けられて彼の仲立ちで神の国で結婚する話(46.「夕張に暮らしたある貞女の物語」)など多様な話が存在する。

上記二つのあらすじを以下に記す。

## 52. ワシ神の化身と人間の娘 —あらすじ—

私は小さな村に住んでいる一人娘だった。秋のある日、一人の老人が杖ををつきながら、川沿いに下ってくるのが見えた。老人は、河口の旧友に会いに行くと言うので、私は一緒についていくことにした。そうこうして二人は河口の家まで辿り着いたのだが、旧友はすでにこの世を去ってしまっていた。

老人は帰り際に「私に親切にしてくださったお嬢さんにお礼の宝物を送り

たいので、一緒に家まで来て欲しい」と言うので、私は次の日に老人と一緒にカムイの小山に登った。そこには一軒の黄金の家が建っていた。すると老人は、「これほどまでに心の綺麗な娘はカムイにもいない。ぜひ私と一緒に来てくれ」と言い出したのだが、残された両親のことを思うと何も言えなかった。

翌朝、目の前にいたのは老人ではなく、立派な姿をした青年であった。青年は「実は私は人間ではなく、クマタカの首領の息子である。お前の両親の面倒も見るから、ぜひ私と一緒に来てくれ」と言うので、私はそれを承諾した。私は宝物を持って家に戻り、数日して青年も家にやって来た。両親に事情を話し、許してもらい、両親は別棟、私たちは本棟で暮らしていくこととなった。村人も私の旦那を「カムイの旦那様」と呼んで親しんでいる。

#### 46. 夕張に暮らしたある貞女の物語 —あらすじ—

私は夕張に住む人の妻であった。夫に先立たれ一人で娘を育ててきたのだが、娘に婿をもらって三人で暮らしていたところ、娘と婿も先に死んでしまったので、たった一人の孫を大切に育てて暮らしていた。孫も一人前の男に成長し、早く嫁をもらって安心したいと考えていた。

ある日、私は急に目が見えなくなってしまった。そして孫は「年寄りというものは自分一人で暮らしてみたいものであろうから、お婆さん用の家を作ってやる。もうその家を仕上げてしまったので、僕がおばあちゃんを背負ってその家に連れて行ってあげよう」と言って私を背負い、山奥まで連れてきた。

山奥には家が確かに建っており、孫は私をその中に案内したあとに、戸も窓も締め切ってなんとその家に火を放ち、自分はもとの家へと帰って行ってしまった。私は煙に気づき、どうにかして逃げようとするが、戸も窓も閉められているので開けられない。なんとか壁の薄いところを何度か力を入れて押すことで外に出ることができた。目が見えぬまま、雨に打たれて体が冷えながらも、下り道を転がり落ちながらもとの家へ戻ろうとすると、「こちらへ来なさい」という声があるので寄って手で触って声の主を確かめっていると、なんとそれはクマであった。クマの懐に入って眠りこけた夢の中で、立派なクマの化身が言うことには「お前の心や行いが良いものだから、私の縁戚の山裾に住むいとこの熊の神がお前に惚れて、視力を奪い、孫を巫術で操ってお前

を山の家に置き去りにして、焼いて殺して魂と結婚しようと考えていた。私はそのようなことはなんとか防ぎたいと思って、お前を逃し、私のもとに来させたのだ。お前はそのまま家に帰るのだよ。お前の孫には良い嫁を遣わせるから夫婦にするといい。その後にお前はこの世をあとにして、山裾の私のいとこと夫婦になるものだから、ぜひ了承してほしい。」ということであった。

目覚めると私はすっかり目が見えるようになり、大急ぎで家に帰った。家では孫が我に返ってすっぽり寝ていたので、訳を話すと泣いて謝り、安堵したようであった。それから私たちは楽しく暮らしていると、どこからかとても気立てのよい女の人がやってきたので私たちは嫁に迎えた。今私は病気になる、この世を去ろうとしている。死んだあかつきには山裾の熊の神と夫婦になるものだから、孫にはこの話を聞かせるのですよ、と夕張に暮らしていた女性が語った。

ワシ神の化身と人間の娘の話では、アイヌモシリにおいて異類婚が成立している話である。ワシ神である老人もとい青年は特に早死にもすることなく、アイヌモシリのコタンにおいて主人公とともに暮らしていくこととなる。この話からは異類婚の忌避という主題とはまた違ったテーマが見えてくるようにも見える。

また、夕張に暮らした貞女の話については、一度熊のカムイが主人公を殺して魂を奪おうとするが失敗している。しかし、その後その熊のカムイの親戚(いとこ)によって、二人の婚姻が仲立ちされ、最終的に人間の主人公はカムイモシリで山裾の熊のカムイとの結婚することになる。

この話においては主人公の女性はすでに夫に先立たれており、山裾の熊のカムイが主人公に対して求婚行動を行ったタイミングでは女性は婚姻関係にはない。また、その後も人間の男性と婚姻関係になることなくこの世を離れ、カムイと一緒にいる結末を迎えている。つまり、この話においては高島(2006b)の主張する「異類婚の忌避に対する抜け道としての二重婚」は働いていないことがわかる。

またその他に、散文説話のテーマが忌避である証拠として「人間は人間、神は神と結婚すべきなのに…」という散文説話の中での定型句が存在する。

---

[*kamuy anakne oha kamuy ukor pe ne somo an kuni p ne hawe ne* (神様というものは、ただ神様同士で一緒になるものだ)] 49. 「雷神を負かした娘」(p.163)

しかしながらこの定型句とは別に「人を好きになる気持ちは人間も神も同じである」という定型句も存在していることも指摘する必要があるだろう。

[*kamuy kewtum anakn aynu kewtum anakn sukupkur kewtum uehosi oka ka somo ki. iosikkote kewtum anakne aynu ne yakka kamuy ne yakka uneno okay pe ne kusu...* (神の気持ち、人間の気持ち、大人の気持ちに変わりはないのです。人を好きになる気持ちは人間であっても神であっても同じようにあるものなので...)] 47. 「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」(734 ~ 738 行)

以上の文献とは異なり、中川(1997)は、その一部で人間とカムイとの婚姻を扱っており、そこではカムイが人間に恋をして、結婚が成立する場合と成立しない場合の両方があることを指摘し、それぞれのタイプの物語の例が挙げられている(pp. 108-118)。そして婚姻が成立した場合には、そのカムイの血を引く一族が後に続いていくことになり、散文説話はその一族を説明する由来譚としての機能を果たしているとの説を提示している(pp. 113-114)。これは、異類婚が禁忌であるとの見方を最初から採用していない点で、本論の論旨にも沿うものであるが、どのような場合に婚姻が成立し、どのような場合に婚姻が不成立に終わるかの傾向を検討するまでには至っていない。

以上の先行研究の検討の結果から明らかになるのは、人間とカムイの異類婚が禁忌ではないということは、より具体的で数多くのデータにもとづき、改めて検証される必要があるということである。また異類婚の成功と失敗の要因の分析は未解決のままに残されていることも明らかになった。現在公開されている物語の数が増えたことで、これらの課題に取り組むことが可能になった。

## 2 異類婚姻譚の広域的分析

本論では、公開されている異類婚姻譚 55 編を集め、物語の中に含まれるテ



ーマ、項目等を抽出し一覧化したデータを使用し、異類婚姻譚において物語にどのような要素が存在しているのかを確認し、分析を試みる。取り扱った物語についての情報は論文末尾にて記載する<sup>6)</sup>。これまで未公開だったアイヌ語口承文学の資料が複数のアーカイブで公開されるようになることで、増大した資料群に基づいた研究が必要とされるようになった。これは、それまでに扱われた主題においても新たな検証が必要となることでもあり、また数が増えたことで調査・検証の新たな方法が必要となるということでもある。奥田(2017)は、アイヌ語の原文だけでなく、日本語のみでアーカイブされているアイヌの口承文芸も広く扱うことの重要性と課題を指摘している。これまでのアイヌ口承文芸研究は、研究者が直接、現地調査を行い、その中で収録した説話を基に進められてきたが、新たな調査でアイヌ語の原文資料を採録できる機会も減り、代わりに過去の研究者の残した資料の公開が進む中、倫理観や幸福観など、アイヌの散文説話の中にある価値観や世界観を検証するために、これまでのように自ら採録したもののみならず、多くの公開された資料を用いて口承文芸の研究にあたる必要があると論じている<sup>7)</sup>。以下は、このような関心に基づいた試みである。

散文説話要素ごとに抜き出して分類する作業において、「カムイの正体」「求婚が人の姿で行われるか、動物の姿で行われるか」「婚姻が成功するか」「どこで暮らそうとするか」など計21項目を設定した<sup>8)</sup>。ここでは、その中で重要と思われる集計結果について紹介する。

・異類婚が成功した物語と失敗した物語に分けて集計すると、成功話が25話、失敗話は31話であり、異類婚の成否の間に大きな数の差が見られることはなかった。

・先行研究で異類婚が忌避されているとした主張の根拠として使用されている「神は神同士、人間は人間同士で結婚するものなのに…」という定型文は全体の1/4以下でしか登場せず、異類婚が成功する話では全く登場しなかった。

以上2項の集計結果をもってしても、アイヌの散文説話における異類婚姻譚の中で、物語の規範として、異類婚に対する忌避があると言うことは難しいことが分かる。今回手に入った散文説話の数を比較しても、異類婚が退け

られている話の数が、異類婚が成就する話を大きく上回っているとは言い難く、また、先行研究における忌避の象徴として用いられる「神は神同士、人間は人間同士で結婚するものなのに…」という台詞も、決して多くの話で定型句として使われているものではなく、むしろ登場する話の方が少ないという結果になった。

さらに今回の分析・集計では、異類婚の成否に影響を与えている可能性がある要素として、以下を特定することができた。

・異類婚が成功した話 25 編のうち、婚姻に別れが描かれる(早死にするなどでカムイ側が先に天の国に帰る)話は 15 話、婚姻に別れが描かれず、継続する(コタンまたは人間世界の境界領域(自然領域)で生活を送り続ける)話は 10 話であった。

・婚姻に別れがある描写が存在する物語 15 編のうち、天の国で人間とカムイが再び結ばれる描写がある話は 6 話、結ばれない話が 4 話、記載のない話が 5 話であった。

・カムイの巫力を成功譚、失敗譚別にみたときに、成功話ではカムイの巫力が高いとされているものが約 3/4 を占めているのに対し、失敗話ではカムイの巫力が低いものが 1/3 近くを占めている。必ずしも巫力が高いと成功するわけではなく、また巫力が低いからといって失敗するとも限らないという結果となった。

・異類婚のアイヌ側の家族構成を集計すると、成功話に比べて失敗話の方が、圧倒的に父母、兄弟、姉妹など親族が記載されている場合が多く、兄と姉が登場する話は、失敗話より成功話の方が多かった。

・結婚が成就した異類婚で、カムイが人の姿で求婚した話は 20 話、動物の姿で求婚した話は 5 話であった。また、成就しなかった異類婚で、人の姿で求婚した話は 10 話、動物の姿で求婚したものは 21 話であった。北原(2018)は異類婚が成就する要素として同じ姿になるという法則を主張していたが(p. 33)、今回の集計結果では相対的に少ないものの、主張とは異なる形の婚姻成就も確認できた。

・求婚の形態の中から、どのように結婚するつもりだったかという要素を抽出し集計したところ、殺して魂とカムイモシリで結婚しようとするものが全体

の約1/3を占め、人間の村で結婚生活を送ろうとするものは全体の1/4近くであった。また、成功話と失敗話別に分けると、失敗話では殺して魂と結婚する型が集中し、成功話ではコタン（人間の村）で結婚生活を送るものが集中した。

・成功話では、コタンまたは人間世界の境界領域（自然領域）で生活を送ろうとする話型が大多数を占めているのに対し、失敗話においてはほとんどがカムイモシリ（神の国）で生活を送ろうとしていた<sup>9)</sup>。

・成功する場合において本人、カムイの親族、本人の親族の3者の同意が一切ない状態でのものは25話中2話しか存在していなかった。また、失敗する話の中で本人・カムイの親族、人の親族の同意が一切ない状態のものは31話中28話であった。

これらの集計は、アイヌの異類婚姻譚における一定の傾向の存在を示しつつも、同時にアイヌの異類婚を構成するモチーフや要素、展開が一意に設定されているわけではない可能性を示している。アイヌの散文説話における異類婚姻譚には、そこに忌避などの共通のテーマと呼べるものは存在せず、物語を構成する様々なモチーフや要素の影響によって展開が左右されているということになる。

### 3 散文説話から見る異類婚

上述した分析結果は、物語を読み解く上で重要な、要素と要素をつなぐコンテキストや、1話ごとの起承転結などを捨象したものとなっており、この結果のみで異類婚に関して主張を展開していくことは難しい。そこで本章では、上記の結果を起点として1話1話の散文説話のストーリーや展開を紐解いて分析し、前章での数量に基づいた分析では掴めなかった、アイヌの異類婚を構成する要素を改めて検討する。

#### 3.1 異類婚の忌避の再考証

はじめに、アイヌの散文説話においていくつかの例を紹介し、忌避が全体を通して確認できるのかを改めて検討する。まず、高島(2006b)と荻原(2016)が異類婚の忌避の例として紹介した11.「雪狐の兄弟の話」とその類話

---

29. 「白キツネ兄弟の物語」を検討する。以下に 11. 「雪狐の兄弟の話」の簡単なあらすじを記述する。

### 11. 雪狐の兄弟の話 —あらすじ—

私は雪狐(エゾイタチ)の兄弟の弟です。二人で暮らしていたのですが、ある日突然兄が川下の村の村長の娘を好きになってしまいました。兄は川上の村の村長に化けて、娘に求婚しようとしていました。私はそれに気づいて急いで大きな雄犬に化け、娘のもとに先回りし、求婚してきた兄を娘に近づけさせないようにしました。

一度は諦めたように見えた兄でしたが、ある日また兄が出て行きました。私はそれに気づかず、気づいたときには兄は娘の魂を抜き取って帰ってくるのが見えました。私は大慌てで人間に化け、兄の手から娘の魂をはたきおとすと、魂を拾って大急ぎで川下の村まで走りました。娘の亡骸の胸に魂の玉粒を一生懸命擦り付け、ようやく生き返らせることができました。村の村長は多くの宝物を私に譲ろうとしてくれましたが、私はイナウだけもらおうと、家に帰り、ふて寝している兄の肩をイナウで突き刺しました。

「この性悪兄貴め。人間の一人娘を欲しがって、神様にとがめられるようなことをしているから私がこらしめたのだ。これからもまたこのようなことをするのであれば、私たちは他の神様から悪神にされてしまうのだ。」と兄を激しく罵ると、兄も反省し、納得した様子であったので、私は兄を解放してやりました。川下の村の村長に夢見で兄がしたことを謝り、ことの経緯を説明しました。そのあとに、大勢の神様を呼ぶと、私は私がしたことを他の神様から褒められ、神の国の酒盛りに仲間入りすることができました。

なので、私はえらい神様でしたが、知られていなかったので、川下の村の村長の娘の命を救って生き返らせたので、知られるようになり、祀られるようになったのだよ、と雪狐の兄弟の弟が話しました。

11. 「雪狐の兄弟の話」では人間の魂を取ってきた雪狐の兄に対し、弟が糾弾している。その中では「川下の村長のたった一人の娘を欲しがろうとした」、「アイヌの魂を抜き取ってきた」ことを責めており<sup>10)</sup>、また類話 29. 「白キツ

ネ兄弟の物語」の方では、「アイヌはアイヌであるものに恋をして、カムイはカムイであるものに恋をするものなのに、アイヌの娘にお前は恋をして…」<sup>11)</sup>という定型句も登場する。

しかし一方で、異類婚が成功している話 28. 「白狼が人間の妻になった」および 5. 「沼貝の王様の娘を妻にした石狩の長者の話」等を検討すると、全く逆の結果が示される。どちらも異類婚が現世において成立し、人間の世界（アイヌモシリ）で生活して子どもを儲けている。特筆すべきは、両話ともにカムイの親族からの合意が得られているということである<sup>12)</sup>。

52. 「ワシ神の化身と人間の娘」および 46. 「夕張に暮らしたある貞女の物語」などにおいても人と神との婚姻が成立しており、共通のテーマとして忌避を見ることはやはり難しい。

さらに先行研究で異類婚の忌避の根拠として用いられていた「神は一度神の国に帰り、人間の世界では一度別れが訪れる」という「二重の婚姻」展開について考える。この「二重の婚姻」こそが人間と神が異類婚忌避の中で婚姻を行い得る「抜け道」となっているのだと高島 (2006b) は主張しているが、これに関しては 39. 「人を見そめて下界におちた雌熊を改心させたサッポロの人の話」の注釈を以下に引用する。

「子孫を残さないままに男の命を奪うと、その家は跡継ぎもなく絶えてしまい、ついには神々を祭る人もなくなり、神が神としての地位を失うことになる。子孫を残した後に命を奪うのであれば、人間への配慮をしたということで幾分なりともその罰は軽減されるので、メスグマは、娘を身ごもったのを機に、今まで堪えていた気持ちを爆発させて子供の誕生をみる前にいとしい男にせまったわけである。」(p. 118)

上記の説明は殺して魂を奪う行為に対しての注釈ではあるが、人間界で結婚したのちに一度別れがあり、再び神の国で結ばれるような話に対しても当てはめることができる。25. 「熊の神様に惚れられたが、熊神は神の婚約者のところへ戻った」では、熊は一度境界領域（自然領域）で人間の娘と結婚し、のちに神の国（カムイモシリ）に帰ることになるが、人間の妻と、そののちの

---

人間の夫の世話をするように人間との間にできた女の子を地上に残し、また、人間の夫と主人公の間にもたくさんの子どもが生まれてから、主人公は死ぬこととなる。この展開には、アイヌの子孫系譜が途絶えないようにしている配慮が多く読みとれる。

もし異類婚が禁忌として扱われ、その結婚生活の破綻が禁忌の証拠となるのならば、46.「夕張に暮らしたある貞女の物語」ではカムイの親族から直々に、アイヌの娘にいとこのヒグマに嫁に行くように言われる展開や、5.「沼貝の王様の娘を妻にした石狩の長者の話」においても、ある日唐突にカムイの娘との別れを経験したときに、悲観的にならず、「何、神様が言ったことだ。」と気持ちを切り替えて、最終的に二人はカムイモシリでもう一度結婚するような描写が存在していることは考えにくい。

以上のことから、アイヌの散文説話における異類婚姻譚が、異類婚の忌避という原則に則っているとは言えない。

### 3.2 異類婚の成否に関わる要素

次に、実際に異類婚にはどのような要素がその成否に関わっているのかについて検討する。

異類婚が失敗する話において最も多い手段は「殺して魂を奪い、カムイモシリで結婚する」であった。しかしカムイが人を殺す行為自体、そもそも求婚とは関係なく大きく罰せられるものである。

これを具体的に示すため、47.「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」という散文説話のあらすじを以下に記す。

#### 47. 「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」—あらすじ—

私はユベツ川の河口で兄と二人で暮らしていて、兄は私に「決して海のそば、川のそばへは行かずに家の近くで遊ぶのだよ」と言って猟に行っていました。私が成長し、一緒に猟に行くようになりましたが、兄は私にばかり煮炊きをさせて、自分では決して料理をしませんでした。ある日、海の船着場に一艘の船がやってきて、海の向こうの国の人が私の家を訪ねてきました。兄は私に「人が泊まりに来るのは初めてだ。いっぱい料理を出してあげなさい」と

言いました。自分で料理をするものではないのかと腹を立てながら、私は食事を出しました。食べ終わると、兄と沖の国の人は、それぞれ自分の話をお互いにしていましたが、沖の国の人が切り出しました。「私にはふたりの妹がいるのですが、下の妹には、遠くや近くから神のような旦那さんが妻にするために求婚に来るのです。うちには姉もいるのに、それを差し置いて妹と結婚するなんてと思っても、頼み込んでくるもので承諾して、私たちの家の右座側に小さい家を建てて一緒に住ませたのですが、翌朝になると傷もないのに彼らは死んでいるのでした。父も長者なので、死んだ人への償いを何度もしているのですが、もう何回もこのようなことが起きていて父は苦しんでいます。そのため父は、この国の人の憑神が強いことを聞いて、私に古着でもなんでも分けてもらってこいと使いに出したということなのです」すると兄は「古着の代わりに、私の弟を明日一緒に行かせましょう」と言ったものですから、私は本当に驚きました。沖の国に私を行かせるとは、兄は私の兄ではないのか、と私はなおのこと怒り、ふくれて寝てしまいました。

翌日、私はまだ怒っており、腹を立てていましたが、怒りながら荷物をまとめていると、兄が新しい木幣を抜いてきて「この木幣を荷物に入れて持って行きなさい。アヨロという場所で途中泊まるはずだから、そこに大きな祭壇を作ったので、お前はそこで木幣を立てて、私の名を言って自分はその弟だと名乗り、祈りなさい」と言って、木幣を渡してきました。我々は船に乗って、途中泊まる場所まで来ると、本当に大きな祭壇が立っていました。私はそこに行って、兄が言った通りに兄の名を述べ、弟であることを明かし、木幣を立てて祈りました。すると、夢の中で神のような人が現れて、私に言いました。

「これ、この国の若い人よ。よく聞きなさい。あなたの兄はあなたに悪い心を持っていたのではなく、兄は小さい頃から透視の力を持っている人で、沖の向こうの国で起きたことや、この国で起きたことが見えているのですよ。あなたが行くところにこのお守りの小さい袋を持って行きなさい。あなたが無事に帰ってきて、またこのアヨロに戻ってきて泊まるときに祭壇に返してください」と言って、神は私の懐にお守りを入れました。私は起きて、事情を知ったのですっかり明るくなって、食事をして話もたくさんしました。それ

からまた舟で進んでいって、ようやく沖の国の村まで着きました。当人の家に入ると、父は「古い肌着をもらってこいと言ったのに、人を連れて来るとは何事か」と怒りましたが、沖の国の人たちが事情を話すと、例の娘を連れてきてくれました。娘はとても美しい人ですが、泣いてばかりいるような様子でした。私と娘は、家の右座側にある小さな家に入って一緒に食事を食べました。そのままそこで横になると、真夜中になったあたりに天井の煙出し窓から何かが入ってきたような音がしました。目を開けていると、大きな大蛇が天井から降りてきていました。私は懐を探り、小さな袋を取り出すと中には細い針と太い針が一本ずつ入っていたので、太い針を出して大蛇の尻尾を激しく突いたところ、私の上で大きな音がして、何がどうなったのかわからなくなりました。

気がつくと、あの家の老人に膝枕をされておりました。あの大きな音で、これは雷神のしわざであるとわかり、今は雷の神に祈りを届けていました。「神は神同士で結婚し、人間は人間同士で結婚するものなのに、私の娘の婿を二、三人も襲い、償いの品を私に出させて私を苦しめていたのだ。雷の神のしわざであったのなら、もし私の気が収まるようなことにならなかつたら、いかに雷の神であっても、父子ともに地下の地獄、地下の冥府へ踏み落としてやるぞ。」私はそのあとも眠ったり起きたりを繰り返しましたが、やがて回復すると、夢を見ました。神のような立派な男性が私に語りかけてきました。「私は雷の神の息子で、神の国でふさわしいものを探していましたが見つからず、人間の国を見てみるとこの若い娘こそが私にふさわしいものでした。なんとか私の妻にしたいと思っていたものでしたが、娘のもとには求婚する人が何人もやってきたので、私が降りてきて殺したのです。誰が人間の国で誰かと結婚したら手に入れることができないので、殺してそれで父親が苦しんで、娘を殴りでもして殺してしまえば、そこで魂をとって神の国で妻にしようと思っていたのです。私一人が悪神として蹴落とされるならまだしも、父も母も一緒に悪神にされると聞いて大層驚いています。父と兄は私を叱って『人間の国でお前がそのようにしても、お前が好きでしたことなのでひとりでお前が罰せられるならどうしようもないが、父も母も一緒に罰せられることをわかってたのか』と周りの神も私を責めます。もうどうしようもないので、私の持ち物をあ



るだけ人間の旦那さんに償いの品として出すつもりです。もし普通に神の国の仲間入りができる程度の祈りを私にしてくださいなら、いつまでもあなたたちを守って、仲良く暮らせるようにしますよ。」

私は起きると、本当に宝の山が外にあったので、私は雷の神に祈りを捧げてやりました。娘二人と兄たちが、私と宝物を村へと送り届けてくれ、途中で私はアヨロに泊まり、祭壇にお守り袋をお返ししました。村へと着くと、みんなで食事をし、翌日兄は「姉娘は私と、末娘は弟と結婚するのだよ」と言って、私たちは結婚しました。私たちはそれから兄のおかげで獵運にも恵まれ、子供も大きくなって結婚し、兄は先に亡くなりました。私たちが良い暮らしができるのは雷の神に守られているからだよ、と言いついて聞かせて、私は年を取って死んで行くのでした。

47. 「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」において、沖の国の老人は雷の神の息子に対して、

- ①：「kamuy anak oha kamuy ne ukor, aynu anak oha aynu ne ukoe pe ne hike, (神は神同士で結婚し、アイヌはアイヌ同士で結婚するものなのに)」(555～556行)
- ②：「tane pakno kannakamuy kor sanniyō ani a=wenmatnepoho opirsak no to kew ka re kew ka osikoni ani (今まで雷の神のたくらみで、私の娘のところまで傷もなく、2人も3人も襲ったことで)」(557～559行)
- ③：「a=pirkakor pe kewepnian kor ananaine akoyaywenukar (私の良い持ち物を償いの品として出していたので苦しんでいたのだ。)」(560～561行)

と抗議している。

つまり、雷神に対して人間の娘の父親は「神が人間に恋心を抱いたこと」「実際に雷の神の下の息子が人を殺してしまったこと」「老人自身が雷の神の企みで受けてしまった損失、苦痛」を抗議している。

これに対して雷神は「老人自身が雷の神の企みで受けてしまった損失、苦痛」についての謝罪、補償を約束し、両者は和解している。また、その中において人間側は雷神に対して「神の気持ち、人間の気持ち、大人の気持ちには変わりはないのです。人を好きになる気持ちは人間であっても神であっても同

じようにあるものなので…」<sup>13)</sup>と述べている。この台詞はいくつかの散文説話に登場し、「神は神同士、人間は人間同士と結婚するものなのに…」という定型句と反対の立ち位置を取る。つまり、この抗議は人間の娘に恋心を抱いたことよりも、人間側に損失や苦痛を与えてしまったことが本質であり、むしろ抱いた恋心に関してはある程度許容される姿勢を見ることができる。

また集計結果によると、失敗話に両親が登場人物として現れる場合が多い。両親がいない場合でも、兄などが下の兄弟を育て、保護下においている話が見られる。親族はその役割の中で、アイヌがカムイに望まぬ結婚で連れ去られようとするのを引き戻す役割を負うこともある。1.「消えたちんちん」では、ケソラブの娘に殺されそうになった息子を助けるために、父親が神々に呼びかけ、これを阻止している。異類婚が退けられる展開にも多彩な要因が存在しており、全体を律する単一の法則は存在しないということを改めて証明できる。

また、親族については52.「ワシ神の化身と人間の娘」および5.「沼貝の王様の娘を妻にした石狩の長者の話」などの話では異類婚の成立を認めており、異類婚を退ける役割のみを持っているわけではないことが窺える。また、28.「白狼が人間の妻になった」では、白狼の娘に対してカムイの両親が、人間の男と結婚するように告げており、5.「沼貝の王様の娘を妻にした石狩の長者の話」では、カムイの娘の父親である沼貝の王様とその妻が、二人の結婚を認め、喜んでいる描写を確認することができる。

当然、本人同士の合意形成も異類婚成立の要素となりうる。9.「ウサギの穂摘み」では、アイヌ側はカムイの娘を気に入っていたにも関わらず、カムイの娘側に結婚まで至る意思がなく、異類婚は成立しなかった。また、37.「カラスの神と危うく結婚するところだった」では、カラスの求婚に対してアイヌの娘が拒否し、異類婚は不成立になっている。

またこの他にも、巫力の強大さが異類婚の成否に影響を与えているものもある。41.「ヘビの血」では、蛇のカムイの強大さが、殺人という禁忌を覆して異類婚を成立させている。この話ではヘビのカムイが人間の男に惚れ、自分のものにしようとするのだが、一度目は蜂のカムイに邪魔されてしまう。しかし2回目には男に巫術をかけることに成功し、男を殺して魂を奪い、カ

ムイモシリで結婚することとなる。

異類婚が成功する物語ではほとんどの場合でカムイは人間の姿で人間に求婚を行っている。動物の状態では求婚を行うときは、大抵の場合が殺してその魂を奪い取り、魂とカムイモシリで結婚しようとしているときである。北原(2018)はアイヌの異類婚姻譚について「共生する条件として「同じ姿になる」ことが重要であり、それが満たされない場合には婚姻関係が成立しない傾向が指摘できるだろう」(p. 33)と指摘しているが、8.「妹が姉の蛙の夫を困らせた話」においては、動物の姿(蛙)と人間の娘が婚姻を行っている例も見とれる。以下に8.「妹が姉の蛙の夫を困らせた話」のあらすじを記す。

8. 「妹が姉の蛙の夫を困らせた話」—あらすじ—

私は姉と二人暮らしをしておりました。姉はなんでも自分でやって、私は何もせずにいたのです。姉が大きくなってからは、姉は朝になると料理して私に食べさせ、また新しく鍋をかけて、おいしいおかゆを作って、そのおかゆを持ってどこかに出かけているのです。毎日毎日そうしているので、ある日後をつけて外に出ると、家の下手の大きな沼、そのへりで姉は鍋を置いて「コンカネノサポー、コンカネノサポー」と叫びました。すると、沼の真ん中から大きな蛙が岸へ上がってその鍋の中に入り、かゆを食べてまた沼に戻って行きました。私はたまげて帰ってきました。見てしまったことは姉には黙って暮らしていたのですが、ある日姉が山に行ってしまったので、その後で私は鍋をかけて、どっさり煮立ったおかゆを持って、沼のへりへ行って「コンカネノサポー、コンカネノサポー」と叫びました。すると、沼の真ん中から大きな蛙が岸へ上がってその鍋の中に入りました。鍋はひどく煮立っているので、蛙は熱がって悶えている様子でしたので、私は笑っていました。蛙は死にそうになりながら沼へと戻って行きました。次の日、姉はまたおかゆを作って家を出たのでこっそり後をつけて見たところ、姉が蛙を呼ぶと沼の中央から「懲りたもの、懲りたもの」と何者かが言う声がしました。姉はひどく罵りながらかゆを沼の中に捨てて、家へ戻って私を罵りました。「今までこんなに大切にお前を育てていたのに、このように私の良い神の夫に懲りられるようにお前がしたんじゃないか？」と言われて私は黙っていると、「今まで一

緒に暮らして来たけれども、私はどこかへ行ってしまふから、お前は一人であるがいい」と言い、罵りながら荷物をまとめて出て行ってしまいました。自分のしたことなので何も言えず、その後一人で暮らしていたものでした、と一人の娘が物語りました。

この散文説話の中では、主人公の手によって破局は迎えるものの、terkeype(蛙)と人間がそのままの姿で婚姻関係を成立させていることが確認できる。主人公の姉自身も、破局へと導いた主人公を激しく罵って出て行ってしまふ描写から、この婚姻を肯定的に捉えていることがわかる。

つまり、婚姻時にカムイは人間の姿である必要は必ずしもなく、むしろそのアプローチが人間の姿でなされているか、動物の姿でなされているかも含めて、異類婚姻譚の多彩な要素を構成する一つとなっていると言える。

### 3.3 カムイの種類・性質から見る異類婚姻譚

本節ではカムイの個々の種によって異類婚姻譚の成否に影響があるのか、カムイごとにどのような異類婚姻譚が展開されるのかを検証する。

#### ・熊神

熊のカムイの場合は異類婚が成功する話、失敗する話双方が存在している。また、その展開の仕方は多彩であり、51.「鷲神に育てられた少年」ではアイヌの婚姻儀礼の作法に則って村において結婚を果たしている。25.「熊の神様に惚れられたが、熊神は神の婚約者のところへ戻った」では人間世界の境界領域(自然領域)の中で逢瀬を重ねる通い夫として異類婚を行っている。高貴なカムイとして登場するものもあり、また、「ヌプリケスン プリウエンクル(山裾の行いの悪い者)」と呼ばれ、悪神として扱われることもある。しかしながら、高貴なカムイだからといって、婚姻が成功するとも限らない。33.「ニ・ポン・ホロケウ イ・エ・ブンキネ(木彫りの狼がわたしを助けてくれた)」は、自ら高貴な熊のカムイであるにも関わらず、人間の娘に恋をして、成し遂げられなかった話である。このように、熊のカムイの異類婚姻譚は非常にバリエーションに富んでおり、多様な展開を確認することができる。

・雷神

雷神は異類婚が失敗する物語に登場する代表的なカムイとして描かれ、登場するのは雷神の息子である。47.「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」では大蛇(タンネブ)の姿として語られ、16.「女のたしなみ」では竜の姿で語られている。特徴的なのは、巫力を用いて最終的に魂と結婚しようとはするが、自ら直接恋愛対象を殺そうとはしない話が多く見られること、殺そうとする手段が複雑化する傾向にあることの二つである。16.「女のたしなみ」という散文説話を紹介しつつ、雷神の異類婚の過程を確認する。

16. 「女のたしなみ」—あらすじ—

私は狩りの名人である夫と、息子の三人で暮らしていました。ある日、私たちのコタンが飢饉になって、上流のコタンに子どもを連れて食べ物を分けてもらいに行くことになりました。食べ物と取り替えるための宝物を持って、子どもをおぶって出かけました。日暮れ近くになってようやく上流のコタンに着いて、大きな家を訪ねて食べ物を分けてもらえるようお願いしました。その家の老夫婦は煮炊きをして私に食べさせてくれ、いっぱい食べ物も持たせてくれることになりました。翌日、村に帰ることになったときに家の若者が送ってくれることであったが、娘の方が送っていきたいとだだをこね、娘に送ってもらうことになりました。二人で色々話しながら下りてきて、コタンの見えるところまで来たというのに、急に娘はここから戻ると言って、止めても聞かずに戻って行ってしまいました。

～ここから娘が物語る～

ある日、子どもをおぶって村を訪ねてきた女性が食べ物を分けて欲しいと言ってきたので、コタン中から食べ物を集めて女性に渡すことになりました。私は同情して家まで送っていくことにしました。もう女性のコタンが目の前まで来たというとき、急に私は帰りたくなったのです。私は女性の引き止めも聞かず、颯爽と帰り、日暮れに家に着きました。父や兄は、なぜ泊まりもしないで帰って来たのだと聞きましたが、私自身急に子どものことが心配になり、いてもたってもいられなくなりました。その次第を父や母に話すと、ただごとではないかもしれないと言って、私にもう一度大急ぎで女性の家を見

てくるように言いました。

夕飯を急いで食べ、月明かりの中で道を走って、先ほど引き返した場所まで到着しました。春の浅い雪についた足跡を慎重に辿りながら進んでいくと、太い立木の空洞の中から声が聞こえてくるので、のぞいてみるとなんとあの男の子が底で泣いていました。私はなんとか男の子を救い出すと、子どもをおぶってコタンを目指して歩きました。村おさの家に行つて、子どもをおぶったまま家に入ると、村おさの妻はきよとんとした顔つきをしています。子どもは寝ていた父親に駆け寄りました。起きた村おさは妻の悪事に気づいて、これはどういうことだとさんざんいじめました。仲裁しようと思つて間に入ると私まで殴られました。そのうち、村おさは半分死んだようになってしまった妻を家の外に引っ張り出しました。私はコタン中の人に助けを求めました。どうやら村おさの妻は悪神に魅入られているようでした。コタンの外れのあばらやに入って、私は妻に食べ物やら薪などを運んでやりました。何回もあばらやに通つて看病し、子どももすっかり私に懐きました。ところがそんなときに村おさが言うには「子どもがこれほど懐いているので、このまま私と結婚してほしい」ということでした。私は慌てて断りましたが、あの子の母親を許して家に戻すのなら、水汲み女として側にいと伝えました。そこまで言うならと村おさは言い、私はコタンの外れのあばらやに通つて、説得をしました。何日も説得した結果、ようやく帰つてくると女性から返事をもらいました。お祝いが始まり、宴会が始まりましたが、女性は一口もお酒を飲まずにそつと家を出て行ってしまいました。悪い予感がした私はあばらやに追いかけると、女性は白装束を身にまとい、今にも短刀で自殺しようとしていました。女性は私に気づいて、言いました。「死ぬ前に聞いてもらいたいことがあります。今初めてわかったのですが、神の国のカンナカムイの弟が私に横恋慕して、私を殺して一緒になろうと飢饉を起こしたのです。そして、私が食べ物をもらいに行った帰り道に子どもを殺させ、それによって夫が怒つて私を殴り殺したら、その魂を取り、神の国で結婚しようとしていたのです。子どもをニサ(太い木の穴、空洞)に入れたときも、私は巫術をかけられていて、それを悪いこととも思いませんでした。私に横恋慕したカンナカムイの息子は、この家の屋根の上で待っているのです。先ほど夫が私にくれた盃の酒を飲んだら、神

の国へ一緒にいけないと思ったカンナカムイは、それを私に飲ませないようにしたのです。仕方がないので、私は神の国で龍神と結婚します。」

私は「神は神同士、人間は人間同士で結婚して初めて幸せになるものなのに、そんなことをさせるものか」と女性に飛びつくと、爆発音が響き渡り、私は死んだのか眠ったのかわからなくなりました。私は生死をさまよったのちに回復して、事の次第を兄やコタンの人に語りました。男たちは、神は神同士で結婚するものなのに、人間の人妻に横恋慕するとはどういうことか。親子もろとも湿地へ蹴り落とすぞ、と嚴重に抗議の言葉を龍神に送りました。その夜、夢に神らしい若者が出て来て言いました。「私は龍神の下の息子ですが、神の国でもアイヌの国でも、若者の心、つまり恋というのは同じものです。私は仕方ないとしても、親や兄を湿地の国に蹴り落とすのは勘弁してください。私たちに罰を与えてもあなた方にはなんの得にもなりません。もう一度神の仲間になれるようにしてくれたなら、一生守りますよ。」ということなので、悪口を言いつつとりなしてあげました。それから、私たちは幸せに暮らし、女性と村おさとの間にも私との間にも子どもができて、とても良い暮らしをして歳をとったのですよ、と一人の老女が語りました。

この散文説話において雷神は、人間の娘を手に入れるために

1. 村に飢饉を起こす
2. 惚れた女性を村の外に出させる
3. 送ってくれた娘を家に帰す
4. 惚れた女性の子どもをニサに置き去りにさせる
5. 旦那の村おさを正気にさせず、妻を殴らせる
6. 女性に、家にまた迎えるための酒を飲ませない

と、大きく分けて6工程の巫術を用いて、最終的に女性が自殺したら魂を奪おうと画策している。同じ位の高い熊神と比べても、かなり複雑な手順を踏んでいる特徴を確認することができる。

#### ・蛇神

蛇神は非常に強力な巫力の持ち主として描かれ、人間でも、他のカムイで

---

も並び立つものはないほど強力なカムイとして存在し、人間を殺して魂を奪い、結婚しようとする。同じく強力な巫力の持ち主としてイヌエンジュや蜂のカムイがこれからアイヌを守る話が多い<sup>14)</sup>。

このように、カムイの種類によって展開は分かれる傾向にあり、その種類も異類婚の展開を左右する要素となりうる事が確認できる。

カムイの位の差によって異類婚の成否に影響があるのかを検証するため、52.「ワシ神の化身と人間の娘」と37.「カラスの神と危うく結婚するところだった」を比較した。どちらもカムイと人との邂逅から、カムイの家に娘がついていき、家で正体を明かされ求婚されるという流れも類似しており、比較に適している。鷲神はカパチリと呼ばれ、幸運のカムイとして親しまれてきた一方、カラスの神(パシクル)は不吉の対象として忌まれていた<sup>15)</sup>。

52.「ワシ神の化身と人間の娘」では娘は尊いカムイと結婚できる事実に喜んで受け入れ、37.「カラスの神と危うく結婚するところだった」では「誰がこのように兄が可愛がって育ててくれたものを、カラスの嫁にすることがあるか、と思ったので…」と痛烈な拒否反応を示している。ここには、カムイの種類としての位の違い、親しまれやすさが反映された違いがあると読み取ることができる<sup>16)</sup>。

しかし、位が高ければ成功しやすいのかと言われればそうでもなく、雷神などは失敗譚として有名であることは先ほど説明した通りであるが、熊神は成功譚、失敗譚と様々である。一つの基準として、カムイの位というよりも、そのカムイと人間との関係性や、生活の中の距離の差に一つの要因があるとも考えられる。

### 3.4 憑神の思惑

本節では丹菊(2010)の中で注目されていた守護神、または憑神について注目し、考証していく。丹菊(2010)はアイヌの異類婚について「クマやオオカミが相手でも異類婚は基本的に拒否すべきであり、少なくとも「一時的な別離」が不可避である。つまり、異類婚禁止のルールが前提となり、守護神がそれを守ろうとする」(p. 128)と主張しており、守護神が異類婚に対する抑止の力の表現として表れているとする考えを提唱した。



33. 「木彫りの狼がわたしを助けてくれた」 および 30. 「スズメの恩返し」などでは、実際にカムイが人間の憑神（守護神）となって人間を熊の神や、化け物などとの異類婚から遠ざける展開を見ることができる。しかし、カムイが人間を守護する目的としてはこれも様々なものが存在する。30. 「スズメの恩返し」ではスズメは人間からお礼の木幣やお酒を大いにもらい、神の国での神格を高める結果となった。また、15. 「牡鹿を私の姉は夫にした」では人間の娘の子孫の系譜をこの世に残すため、白の神が娘を保護している（前掲の 39. における注も参照）。

ただし、決して憑神は「異類婚自体を否定する存在」ではないということは確認しておきたい。15. 「牡鹿を私の姉は夫にした」では憑神である白の神自身が人間の国での娘の系譜を残すために娘と人間の国で結婚しており、51. 「鷲神に育てられた少年」では、鷲神が自分が育てた人間の男を、熊のカムイの娘と結婚させている。彼らは異類婚自体ではなく、そこから派生する殺人や誘拐、望まない結婚、本人の不利益に対して働き、守護することの方が多い。

## 4 カムイとアイヌの関係 モシリ間をつなぐネットワーク形成

本章では抽象度を一段上げ、カムイと人間の関係性について言及し、それぞれの個体・集団でどのような相互的な関わり合いが存在しているのかを検証する。

### 4.1 婚姻における領域侵入

カムイの「異類婚の対象」は人間だけとは限らない。カムイはまずカムイモシリで似合いの者を探し、見つからなかったときにアイヌモシリを見渡す。カムイモシリで見ている相手は同じ種族だけとは限らない。例として\*1「ポロシルンカムイの妹と結婚した」では、カムイである主人公と、ポロシルンカムイの妹が夫婦として暮らし、ポロシルンカムイの妹の働きによってアイヌの国を悪神から守ることができた、という話である。二人は別のカムイであり、同属ではない。また他にも、\*3「クモを戒めて妻にしたエゾイタチの話」という散文説話でも、クモとエゾイタチの異類婚が語られている。

カムイとしての恋愛、結婚の対象はカムイの間でも同種に限ったものではない。カムイモシリ全体を見渡して、自分に似合いのものが見つければ、種類ごとの領域を超えて、場合によっては異なるカムイモシリをまたいで両者は結婚することができるのである。このように考えると、「異類婚」を実現しているのは人間だけでなくカムイも同様であり、自然の異種族間の婚姻関係の網の目も存在していることになる。

#### 4.2 カムイの社会ネットワーク形成

アイヌの神話においてカムイモシリは一箇所ではなく、それぞれのカムイが暮らす場所で山の上や空の上、海の中などで分かれているというのはすでに知られているが<sup>17)</sup>、カムイはカムイ自身の社会集団をどのように捉えているのかを考える。

カムイは同種だけではなく、異種のカムイとも婚姻を行うことは先ほど述べた。つまり神々の関わりや交流は、同じ種類のカムイ、同じモシリにいるカムイのみに関わらず広く存在している可能性がある。さらに、3.「姉に殺された娘がエゾイタチの神に助けられた話」では、エゾイタチが主催して神々を宴に招くことが語られている。同じく31.「滝の神に助けられた娘の話」はこれに近い散文説話であるが、ここでも滝の神が他の神々を招く宴を主催している。神話として知られている「ハンチキキ ソツソキヤ」は、スズメの神が酒を醸し、宴を開いて神々に振る舞う中で起こった大喧嘩を語っている<sup>18)</sup>。

さらに、カムイは他のカムイに抗議を送りつけることもある。1.「消えたちゃん」に登場する男性の父親は、ありとあらゆる川と山の神に息子を殺そうとしているカムイの正体を暴くように祈っている。つきとめられたケソラブの父親は、あらゆるカムイから抗議される。

このように、カムイが同種・同族間で社会形成をすするとする、カムイモシリごとの小規模ネットワークでの同族集団形成の考え方に加えて、もっと広く一つの領域で、種族を超えたカムイ同士の集まりやつながりによるコミュニケーションや会議体、社会が形成されている、という可能性に気づくことになる。これは一つの社会ネットワークがカムイ同士の中で形成されている、

と言い換えることもできる。カムイはその社会ネットワークに則り、他の領域のカムイに対して抗議を送り、酒宴に招かれ、招き、またときには相手の領域に入り込み、異類婚を果たすのである。

#### 4.3 カムイの社会構造に組み込まれる人間

このカムイ間のネットワークと人間の関係をみたとき、人間はこのカムイの社会ネットワークの構造に組み込まれている可能性がある。その根拠として以下の3項を挙げることができる。

##### 抗議 [チャランケ] と夢見

神々が人間に対して何か不利益なことをしたり、損害を与えてしまったりした場合に、人間が神々に対し抗議をする場面はこれまでにいくつか紹介してきた。人間は、問題を起こしたカムイに直接チャランケ (抗議) をして問題を解決するように祈ることもあるが、他の神々を通して問題を解決しようと呼びかけることもある。カムイ同士の社会ネットワークが働いているため、他の神々に告げ口をして非難してもらうことにより、カムイに対して抗議の輪を強めることができる。つまり、人間も神々も、同じ手段を用いて当該のカムイへ抗議を送っているという構造が出来上がることになる。36. 「ネッコ 妻がクルミの木に」では、戸口の神が人間に対して不満を抱き、カラスの神を通じて主人公に伝えている。主人公はそれを当人に伝え、問題を解決させている。これは神々の人間に対する抗議が登場し、影響を与える相関が完全に逆転する現象が起きている。

また、人間がカムイの言葉をどのように受信するかで一番よく見られる方法は夢見である。夢の中でカムイが現れ、正体や事件の顛末を語るのは散文説話の中でよく登場する事例である。夢でカムイは直接アイヌにコンタクトを取り、アイヌに「発信」し、アイヌは「受信」する。

これらのことから、アイヌはカムイの形成する社会ネットワークの中に組み込まれている可能性が浮かび上がってくる。これはヴィヴェイロス・デ・カストロ (2015) およびラトゥール (2019) の見方がアイヌの口承文学を考察する場合にも有効であることを示唆している。

## 神と人との異類婚

カムイと人が異類婚を行うことが、お互いの領域に入り込んでいることは上述している。神々が人間の国に入り込むだけではなく、20.「キキンニの女」では人間の女がカムイモシリで結婚生活を行う展開が描かれている。この娘は夫である病気のカムイの天敵の匂いを持つカムイの系譜を持つ人間であったのだが、その匂いでもって他の神を巻き込んで病気の神々は弱ってしまう。このように、互いの領域に入り込んだ神や人間は、その世界に影響を相互に与え合うことができる。異類婚においてはアイヌやカムイがお互いの領域を侵食するが、両者の領域が重なりあう場所が自然の中、つまり境界領域である。また共通しているのは、自然がお互いの仕事の間として重なり合っていることである。お互いがそれぞれにモシリという生活空間領域を持っている中で、両者の生活が重なる場所が自然の中であると考えることができる。

## イナウと酒の贈り物

イナウや酒など、カムイに対する贈り物について考えるとき、それはカムイと人間の互酬関係の議論に繋がる。つまり、カムイと人間は相互に自らの生産物や権能を交換しあうことである種の社会ネットワークを形成しているという可能性である。例えば、カムイは、アイヌモシリへ遊びに赴くとき、自らの体に肉と皮の衣装をまとうて行く。そして人間がそれを狩りとして受け取り、返礼として人間はイナウとお酒をカムイに渡す。また、カムイが人間を守護することによって、人間から返礼としてイナウや酒をもらう。人間は、カムイからの食の恵みや、守護の力によって繁栄し、カムイは、イナウと酒の量や質でカムイモシリでの神格が上がる。つまり、食の恵みや、身体の守護という形でアイヌの生命や社会集団にカムイが大きな影響を及ぼすのと同じように、アイヌの贈るものがカムイの社会集団に大きな影響を及ぼしている。この関係は先の2つのように対等なものではないが、お互いに作れないものを渡し合う互酬の関係が発生している。

中川(2010)も、同様の見解を示している。

「お互いが自分で作り出せないものを受け取り合うことで、お互いの利益

とする。人間と人間との間だけでなく、人間と自然との間にもそうした関係を投影しているのが、アイヌ神の世界観の特徴である。つまり、人間とカムイの間には一種の補完関係があるのであり(中略)、両者がひとつの社会を作っているのだと考えた方がよい。』<sup>19)</sup>

中川(2010)の引用の中でもう一つ注目すべきなのは、人間とカムイが「お互いが自分で作り出せないもの」を保持している点である。つまり、人間とカムイに可能な行為は異なっていることを認識する必要がある。

つまり、これまでに述べた人間がカムイの社会ネットワークに組み込まれる根拠として挙げたものは決して手段として同列である必要はないということである。例えば、人間側の発信としての祈りと、カムイ側の発信としての夢という事象は手段としては別の概念であるが、カムイと人間では可能な行為が異なっていることが是とされているアイヌの世界では、この差は重要ではない。重要なのは、結果として双方で意志の疎通が可能であることに他ならない。ゆえに、カムイと人間が相互的に大きな枠組みの中でやり取りをしている根拠の一つとして成立するのである。

## おわりに

本論文は、アイヌ散文説話における神と人との婚姻譚、すなわち異類婚姻譚を分析し、その性質や構成要素について先行研究をもとに再考証するものであった。

はじめに、散文説話における異類婚姻譚についての先行研究を検討し、その論点と課題を整理し、このテーマに関する問題点と批判の提示を試みた結果、先行研究に対する反証的な散文説話を提唱することによって、異類婚の忌避が存在しているという先行研究の立ち位置を退け、散文説話における異類婚の多様さを指摘する糸口をつくることに成功した。

次に筆者が収集した散文説話の異類婚姻譚55編を、筆者が設定した要素・観点ごとに体系的に分類し、それを集計したものを参考に議論した。これにより、異類婚の多様性を思わせるような集計結果が確認され、一章で紹介した先行研究の見解を退ける大きな根拠を提示することに成功した。さらに、

---

散文説話における異類婚について、その成功や失敗、途中の展開を分ける様々な要素を発見することができ、あらためて要素の多様性について確認することができた。

そして、その分類・集計から推測できる異類婚の要素やテーマについて、個別の散文説話の物語展開を紐解いていくことで分析し、変数の設定を通じた分析をすることで掴めなかった文脈や物語の細部を検討することによって、異類婚について最終的にどのようなことが言えるのかについて論じた。これにより、前項にて体系的に分類し、集計した異類婚のデータに対して、より具体的な根拠を提示することに成功した。

最後に、今までで判明した要素や結論を出発点として、そこから読み取れるアイヌの世界観における人間と神々の関係性について言及した。これにより、カムイとカムイ、カムイと人が相互的なやりとりを行える巨大なネットワークがそれぞれの領域の上に形成されていることを発見することができた。これにより、人間はカムイとある種同質の手段を用いて相互に影響を与え合い、コミュニケーションを図っているということが言える。人間と自然、神は様々な要因により異類婚を成し得るだけではなく、相互に影響を与え合い、お互いの領域に入りあってより広域な社会を形成している、という結論に至ることができた。

## 注

- 1) アイヌに伝わる口承文芸の一つ。短いフレーズの間に「サケヘ」と呼ばれる決まった言葉を繰り返し語る。カムイの行いや行動に対して、人間はどうすればいいのかを語る場合も多い。
- 2) アイヌの民話において「守護神」という存在は、アイヌに対して何かの見返りや報酬、または自分にしてくれたことに対するお礼として人間を繁栄させたり、守護したりするカムイのことである。その人の肩のところに憑いていると考えられていることもあるため「憑神」とも称される。
- 3) 丹菊逸治(2010)「アイヌ異類婚姻譚における「守護神」ニブフ民族の伝承との比較から」『表現学部紀要』(11), p. 128.
- 4) カムイは人間から贈り物をされたり、人間に悪いことをした償いとして人間の憑神になることがある。憑神は守護神としてアイヌを守り、繁栄の手伝いをする。
- 5) 15. 「牡鹿を私の姉は夫にした」(pp. 55-98)
- 6) 1つの散文説話に二つ以上の異類婚姻譚が含まれている場合は、それぞれの異類婚について分けて記載し、要素ごとに分類した。そのため、収集した異類婚姻譚が55編なのに対し、分類合計は57の異類婚を表記したものになっている。

- 7) 奥田統己 (2017) 「アイヌ口頭文芸研究の課題」『こえのことばの現在—口承文芸の歩みと展望—』三弥井書店, pp. 247-251.
- 8) 表項目は
1. 文献
  2. カムイの正体
  3. カムイの巫力
  4. カムイの家族構成
  5. カムイの性別
  6. 相手のアイヌの性別
  7. 異類婚の相手のアイヌは、物語を自叙している主人公であるか
  8. 相手のアイヌの家族構成
  9. 求婚が発生する時点で、相手のアイヌに人間の婚約者・結婚相手・思い人がいるか
  10. 人間側に、いつカムイの正体が判明するか
  11. 求婚は人の姿か、動物の姿でなされるか
  12. 求婚の形態
  13. 求婚の内容
  14. 婚姻が成功するか
  15. 人間は人間、カムイはカムイと結婚すべきというセリフが出てくるか
  16. どこで暮らすか・暮らそうとしているか
  17. 婚姻に別れがあるか
  18. 別れがあった場合、カムイモシリで真に結ばれるか
  19. 婚姻に関して、本人 (主にアイヌ側) の了承が得られているか
  20. 婚姻に関して、カムイ側の親族の了承が得られているか
  21. 婚姻に関して、アイヌ側の親族の了承が得られているか
- の21項目である。
- 9) 一度死んで神の国で結婚する話型は、生前の結婚生活をどこで行うかを集計している。
- 10) 11. 「雪狐の兄弟の話」(p. 62)
- 11) 29. 「白キツネ兄弟の物語」(p. 39)
- 12) 28. 「白狼が私の妻になった」(p. 106)、及び、5. 「沼貝の王様の娘を妻にした石狩の長者の話」(pp. 58-59)
- 13) 47. 「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」(734 ~ 738 行)
- 14) 7. 「アイヌエンジュの神の助けで悪神から逃れた娘の話」
- 15) アイヌ民族博物館『アイヌと自然デジタル図鑑』自然図鑑 オオワシ [http://www.ainu-museum.or.jp/siror/book/detail.php?book\\_id=A0339](http://www.ainu-museum.or.jp/siror/book/detail.php?book_id=A0339) (2019年1月9日アクセス)
- 16) 52. 「ワシ神の化身と人間の娘」(p. 12)
- 17) 中川裕 (2010) 『語り合うことばの力：神々と生きる世界』岩波書店 p. 25
- 18) 「ハンチキキ ソツソキヤ」平取 (2019年9月4日アクセス)
- 19) 中川裕 (2010) 『語り合うことばの力：神々と生きる世界』岩波書店 p. 25
- \*本論に利益相反に該当する事項はない

## 引用文献

<収集アーカイブ一覧>

- ・アイヌ民族博物館「アイヌと自然 デジタル図鑑」 <http://www.ainu-museum.or.jp/siror/> (以下「アイヌと自然」)
  - ・アイヌ民族博物館「アイヌ民族博物館 アイヌ語アーカイブ」 <http://ainugo.ainu->
-

- museum.or.jp/ (以下「アーカイブ」)
- ・アイヌ民族博物館「しらおいポロトコタンアイヌ民族博物館 アイヌ語アーカイブス」  
http://www.ainu-museum.or.jp/takar/ (以下「ポロトコタン」)
  - ・アイヌ無形文化伝承保存会編(1983)『アイヌの民話 アイヌ無形民俗文化財の記録1』  
アイヌ無形文化伝承保存会(以下「文化財1」)
  - ・アイヌ無形文化伝承保存会編(1985)『アイヌの民話 アイヌ無形民俗文化財の記録2』  
アイヌ無形文化伝承保存会(以下「文化財2」)
  - ・萱野茂(1977)『炎の馬 アイヌ民話集』すずさわ書店(以下「炎の馬」)
  - ・萱野茂(1988)『カムイユカラと昔話』小学館(以下「昔話」)
  - ・萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成4 ウウェベケレ編1』ビクターエンタテインメント(以下「神話集成4」)
  - ・萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成5 ウウェベケレ編2』ビクターエンタテインメント(以下「神話集成5」)
  - ・萱野茂(2005)『ウウェベケレ集大成 新訂復刻』日本伝統文化振興財団(以下「集大成」)
  - ・国立国語研究所「アイヌ口承文芸コーパス」<http://ainucorpus.ninjal.ac.jp/corpus/jp/>  
(以下「コーパス」)
  - ・田村すず子(1985)『アイヌ語音声資料2(ワテケさんの昔話:沙流方言)』早稲田大学  
語学教育研究所(以下「田村2」)
  - ・田村すず子(1991)『アイヌ語音声資料5(二風谷の昔話と歌謡・神謡)』早稲田大学  
語学教育研究所(以下「田村5」)
  - ・田村すず子(1991)『アイヌ語音声資料10(川上まつ子さんの昔話と神謡:ペナコリ)』  
早稲田大学語学教育研究所(以下「田村10」)
  - ・中川裕(2011)『千葉大学 ユーラシア言語文化論集 13(2011)』(以下「ユーラシア」)
  - ・平石清隆(2003)『沙流地方のウウェベケレー上田としの伝承一』(以下「上田トシ」)
  - ・平取町立二風谷アイヌ文化博物館「平取町二風谷アイヌ文化博物館公式HP 収録アー  
カイブ」[http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/culture/language/  
story/](http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/culture/language/story/)(以下「平取」)
  - ・北海道教育庁生涯学習部文化課 編(1996)『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ  
9 トゥイタク(昔語り)1』北海道教育委員会(以下「トゥイタク1」)
  - ・北海道教育庁生涯学習部文化課編(1998)『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ  
11 トゥイタク(昔語り)2』北海道教育委員会(以下「トゥイタク2」)
  - ・北海道立アイヌ民族文化研究センター編(2015)『北海道立アイヌ民族文化研究センタ  
ー研究紀要2015.3』北海道博物館(以下「文化研究1」)
  - ・北海道立アイヌ民族文化研究センター編(2017)『北海道博物館アイヌ民族文化研究セ  
ンター研究紀要2:2017』北海道博物館(以下「文化研究2」)
  - ・北海道博物館アイヌ民族文化研究センター編(2018)『北海道博物館アイヌ民族文化研  
究センター研究紀要3:2018』北海道博物館(以下「文化研究3」)

<収集書>

1. 「アカテオマレクル チイエヘ シヨニニ(消えたちんちん)」神話集成5 pp. 42-71
2. 「アコロ エカシ イレシパ ヒネ」田村10 pp. 54-137
3. 「姉に殺された娘がエゾイタチの神に助けられた話」ポロトコタン(2018年12月13  
日アクセス)
4. 「ある村の高台に建っている神の造った館に登っていく男の話」ポロトコタン(2018  
年12月13日アクセス)
5. 「イシカラ ウン ニシパ アネ ヒネ アナン(沼貝の王様の娘を妻にした石狩の長者の  
話)」田村5 pp. 56-65



6. 「イクレスイェとカラス神」アーカイブ (2018年11月12日アクセス)
7. 「イヌエンジュの神の助けで悪神から逃れた娘の話」ポロトコタン (2018年12月13日アクセス)
8. 「妹が姉の蛙の夫を困らせた話」上田とし pp. 1-13
9. 「ウサギの穂摘み」アーカイブ (2018年11月25日アクセス)
10. 「ウッコッナイ アイヌ アネ (好色が元で死んだ男の話)」平取 (2018年1月12日アクセス)
11. 「ウバシチロンヌブ ウイリワッキコロ ワ スクブ オルスベ (雪狐の兄弟の話)」田村 2 pp. 58-65
12. 「馬の神に言い寄られた奥さんの話」ポロトコタン (2018年12月13日アクセス)
13. 「羽毛の海」昔話 pp. 108-114
14. 「エゾマツと魔鳥」アーカイブ (2018年11月25日アクセス)
15. 「牡鹿を私の姉は夫にした」トゥイタク 1 pp. 55-98
16. 「女のたしなみ」昔話 pp. 280-293
17. 「河童神の恋」アーカイブ (2018年11月25日アクセス)
18. 「カラスの恩返し」炎の馬 pp. 35-41
19. 「カワウソが人間に化けた話」炎の馬 pp. 15-24
20. 「キキンニの女」昔話 pp. 274-279
21. 「キクレッポ チチラ ウコイソイタク ヒ アヌ (ヤマベとドジョウが話をするのを私は聞いた)」平取 (2018年11月25日アクセス)
22. 「キネズミに妹をさらわれた男」ユーラシア pp. 95-115
23. 「キム タイワタラプ アパ (山で赤子を拾ったが)」神話集成 5 pp. 8-41
24. 「クマ神の横恋慕」昔話 pp. 171-180
25. 「熊の神様に惚れられたが、熊神は神の婚約者のところへ戻った」コーパス (2018年11月12日アクセス)
26. 「ケレブノイェ ケレプトウルセ (トリカブトとオオトリカブト)」平取 (2018年11月12日アクセス)
27. 「シカを妻にした男」炎の馬 pp. 25-33
28. 「白狼が人間の妻になった」集大成 pp. 97-114
29. 「白キツネ兄弟の物語」文化研究 1 pp. 27-44
30. 「スズメの恩返し」アーカイブ (2018年11月25日アクセス)
31. 「滝の神に助けられた娘の話」ポロトコタン (2018年12月13日アクセス)
32. 「7人目の婿」昔話 pp. 254-265
33. 「ニ・ポン・ホロケウ イ・エ・プンキネ (木彫りの狼がわたしを助けてくれた)」集大成 pp. 165-208
34. 「人間の女に惚れたフリを殺した男」文化研究 3 pp. 60-69
35. 「猫の悪だくみとニワトリ」ポロトコタン (2018年12月13日アクセス)
36. 「ネシコ (妻がくるみの木に)」神話集成 4 pp. 102-124
37. 「パシクルトノ ヤニ アコロ (カラスの神と危うく結婚するところだった)」平取 (2018年1月12日アクセス)
38. 「一人で交易に行って悪神にアりにされてしまった弟の話」デジタル図鑑 (2018年11月25日アクセス)
39. 「人を見そめて下界におちた雌熊を改心させたサッポロの人の話」トゥイタク 2 pp. 59-121
40. 「二人妻、二つの宝」炎の馬 pp. 101-114
41. 「へビの血」昔話 pp. 74-78
42. 「炎の馬」炎の馬 pp. 131-140

43. 「ボンニマ」平取(2018年11月12日アクセス)
  44. 「山の神と沖の神の子を身ごもった女の物語」文化研究2 pp. 53-66
  45. 「山の端の神が人間の女性を好きになり人殺しをする話」ポロトコタン(2018年12月13日アクセス)
  46. 「夕張に暮らしたある貞女の物語」トゥイタク1 pp. 11-47
  47. 「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」アーカイブ(2018年11月25日アクセス)
  48. 「雷神にさらわれた娘」アーカイブ(2018年11月25日アクセス)
  49. 「雷神を負かした娘」文化財2 pp.137-167
  50. 「リスと平原の化け物」昔話 pp.245-253
  51. 「鷲神に育てられた少年」文化財1 pp.99-146
  52. 「ワシ神の化身と人間の娘」アーカイブ(2018年1月12日アクセス)
  53. 「私の姉はウエクル(人喰い鬼)を夫にした」トゥイタク2 pp. 230-264
  54. 「悪い赤犬に毒を飲ませた少女」コーパス(2018年11月25日アクセス)
  55. 「悪い姉に殺されそうになったが滝の神、水の神に助けられた娘の話」ポロトコタン(2018年12月13日アクセス)
  - \* 1 「ポロシルンカムイ トゥレシヒ アコロ(ポロシルンカムイの妹と結婚した)」平取(2018年1月12日アクセス)
  - \* 2 「大まむしがわたしを襲い、蜂の神様に助けられた」集大成 pp. 116-135
  - \* 3 「クモを戒めて妻にしたエゾイタチの話」ポロトコタン(2018年1月12日アクセス)
- \*で記載した3編は、人間と神の異類婚ではないため収録していないものの、重要な参考文献となるため記載した。

## 参考文献

- ・ 荻原眞子(2006)「人と動物の婚姻譚 —王権神話から異類婚姻譚まで—」『説話・伝承学/説話・伝承学会編』(14), pp. 217-231.
- ・ 荻原眞子(2016)「動物カムイたちの「許されぬ恋」 —神謡再考—」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』(18), pp. 1-11.
- ・ 奥田統己(2017)「アイヌ口頭文芸研究の課題」『こえのことばの現在—口承文芸の歩みと展望—』三弥井書店, pp. 247-251.
- ・ 小澤俊夫(1983)「異類婚姻譚にみられる動物の姿」『日本民俗学/日本民俗学会編』(146), pp. 1-14.
- ・ カストロ, エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ(2015)『食人の形而上学』洛北出版.
- ・ 北原次郎太(2018)「アイヌの動物変身譚における「第三の変身」について」『口承文藝研究/日本口承文藝學會編』(41), pp. 29-45.
- ・ 高島葉子(2006a)「アイヌとケルトの異類婚姻譚 —カムイと人の婚姻と妖精と人の婚姻—」『説話・伝承学/説話・伝承学会編』(14), pp. 159-177.
- ・ 高島葉子(2006b)「アイヌにおける人と動物の婚姻譚に関する比較考察 —アイヌ、和人、エスキモー—」『表現文化/大阪市立大学』(1), pp. 39-61.
- ・ 丹菊逸治(2009)「ニヴフの異類婚姻譚」『和光大学表現学部紀要』(10), pp. 60-69.
- ・ 丹菊逸治(2010)「アイヌ異類婚姻譚における「守護神」ニブフ民族の伝承との比較から」『表現学部紀要』(11), pp. 122-130.
- ・ 丹菊逸治(2013)「サハリン口承文学の地域差」『口承文藝研究/日本口承文藝學會編』(36), pp. 54-70.
- ・ 中川裕(1997)『アイヌの物語世界』平凡社.

- ・中川裕 (2010)『語り合うことばの力：神々と生きる世界』岩波書店.
- ・中村とも子 (2010)「日本の異類婚姻譚における人と動物のあいだの距離 —変身の視点から—」『口承文藝研究 / 日本口承文藝學會編』(33), pp. 77-90.
- ・中村とも子, 弓良久美子, 間宮史子 (1987)「異類婚姻譚に登場する動物 —動物婿と動物嫁の場合—」『口承文藝研究 / 日本口承文藝學會編』(10), pp. 20-25.
- ・ラトゥール, ブルーノ (2019)『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.

[受付日 2019. 3. 29]

[採録日 2019. 11. 18]